

児童の思考力高めるICT教育

第36回時事通信社教育奨励賞・推薦校の実践①

奈良県川西町立川西小学校



の子供にとって必要不可欠(福辻校長)と、「GIGAスクール構想」実現に向け、年度計画の作成を始めた。

奈良県川西町は奈良盆地の中心部に位置し、人口8400人余りの町だ。同町は2015年度から教育現場での情報通信技術(ICT)機器の整備を図り、ICT機器を活用した学習活動を積極的に取り入れてきた。全国の小中学生に1人1台、情報端末を配備する「GIGAスクール構想」が、新型コロナウイルスの影響で前倒しとなった中、同町唯一の小学校、川西小学校(福辻智実校長、児童数401人)は、県内でもいち早く1人1台の端末導入を実現した。導入前から、県教育委員会や町教委と連携して教員への研修を実施したり、同校での「GIGAスクール構想」実現のための独自の計画書を作成したりと、綿密に準備してきた。端末導入後は、修学旅行で端末を活用するなど、「あくまでも学習道具の一つ」という意識を持ちつつも、児童が主体的に端末を活用できるようにICT教育を行っている(肩書等は取材時)。

計画作成と教員への事前研修

川西小は、町教委が県域共同調達を利用したことで、昨年10月下旬から児童1人1台の端末を配布することが決まった。そのような中「これから



情報端末の「開封式」の様子(川西小提供)

作成に当たっては、端末導入によって児童が何ができるようになるかをイメージし、そのために、教員が何を指導できるようにするべきかを検討。計画書では①準備・基本操作研修期②基本操作定着期③スキルアップ期――と3期に分け、それぞれの期間で教員がどういう準備をするか、児童がどのようなスキルを身に付けるべきかといったことを、大まかに盛り込んだ。同時に「授業で実際に端末を使えるのか」といった教員の不安を払拭するため、教員向けの研修を実施することを決めた。

誰も知らないところからのスタートだった。福辻校長が当時はそう振り返るように、実際に端末に触れた教員からは「こんなことができるんだ」という驚きの声が上がったという。福辻校長は「実際に触ってみて、こんな場合どうしたらよいか」といった疑問を教員が持つことができた。それを基に、次の研修内容を相談して組んでいった。

端末開封式を実施

作成した年度計画や教員への手厚い研修の効果もあり、端末導入後の児童への指導も円滑に進んだ。その中で、昨年10月29日から11月6日にかけて、児童に1人1台配布された端末の「開封式」というユニークな計らいも。これも、当初の計画に盛り込んでいた内容。福辻校長は「自分たちの学習道具だ」という意識を児童に持ってほしかった」と狙いを語る。

開封式は、多目的室を使ってクラスごとに実施。福辻校長が作成したスライドに沿って、箱に入った状態で机の上に1台ずつ置かれた端末を、児童自ら開封するところからスタートし、端末やロイロノートの設定を行った。セキュリティに対する意識を持たせるために、パスワードも自分で設定させた。児童は端末に触れ、興奮した様子で取り組んでいたという。

また、同じスライドを基に進めることで、各クラスが同じように開封式を終えられるよう工夫したという。

端末導入後、実際の学習にどのような変化があ

ったのか。昨年11月に1泊2日で行った6年生を対象とした修学旅行で、端末を使ったカリキュラムを早速取り入れた。新型コロナウイルスの影響で、目的地を広島県から和歌山県に変更。テーマを平和学習を広島、国連の持続可能な開発目標(SDGs)の17の目標の一つ「海の豊かさを守ろう」にちなんで「海洋ごみ問題について考え、学んだことを下の学年に伝える」をテーマに設定した。

事前学習で児童は、現地で何を調べたいかなどをロイロノートの「シンキングツール」を活用し、整理した。当日、和歌山県みなべ町の海岸で行ったフィールドワークでは、個々の課題に応じて、海岸に捨てられたペットボトルや空き缶などのごみを、端末のカメラで撮影。宿泊施設では、グループに分かれて、撮影したごみの画像をロイロノートで分析したり、分かったことを共有したりした。

この他、修学旅行で児童は、土産を買う際に地域クーポン券をうまく使い切れるよう、電卓を使って合計額を計算したり、訪問した景勝地で記念写真を撮ったりと、端末の機能を積極的に活用する様子が見られた。引率に同行した福辻校長は「端末1台で修学旅行が様変わりしたと感じた」という。

修学旅行を終えてからも、端末が生かされた。同校では、6年生が修学旅行で学んだことを下の学年に伝える「ななま集会」という場がある。昨年は12月に行われ、6年生は修学旅行のフィールドワークで学んだことを、劇と展示で伝えること

通常業務で忙しい教員への負担も考えて「スムーズなセットアップ・短時間」を心掛け、研修は放課後に1こま1時間程度で行った。まずは昨年7〜8月。県教委の指導主事や奈良教育大学の教授を講師に招き、「GIGAスクール構想」とは何か」といった基本的な内容から、教員は学んだ。その後9月からは、県教育研究所から端末の貸与を受け、基本的な操作を各自研修するとともに、情報担当の山岡知樹教諭が講師となり実践形式で研修した。

実践形式の研修には、実際の授業を想定した内容も盛り込んだ。例えば、5〜7人のグループで教員らが先生役と児童役に分かれ、授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」を使って先生役の教員は、課題の作成や提示の仕方、児童役の教員は課題を受け取ってから解答、提出するまでの流れを体験。さらに、先生役と児童役を交代して行った。

「受け身になりがちな研修を変え、教える側に回つたらよいのでは」(山岡教諭)と発案したものであったが、教員がそれまでの研修で学んだことを授業に反映させる良い機会になった。

この他、操作方法を理解した教員が、苦戦している教員を教える光景が見られるなど、研修でコミュニケーションをとり合いながら、少しずつ研さんを積んでいった。

「米IT大手グーグルのコンピュータ」「Chromebook(クロームブック)」がどのような基本ソフト(OS)を搭載しているのかさえ、

になった。その際、例えば、劇のシナリオ作りや舞台の背景に画像を投影する際に、端末を使った。また、児童は集会の準備の進展状況を、端末を使って担任に報告したという。

さらに、3学期に児童はSDGsの17の目標から一つを選び、それに関連する現状や身の回りの状況を調査。児童は「トイレや風呂で1回に使う水の量」や「給食室から出る食品ロスの量」など、各自で決めたテーマの課題解決に向けて、どのような取り組みが必要なのかなどを追究したり、思考したりすることができた。端末があることで、自宅に持ち帰ったり、隙間時間を活用したりすることもできた。山岡教諭は「端末の目新しさもあると思うが、子供たちの学習意欲が持続したと思う」と振り返った。

福辻校長は、ICT教育について「児童にとってより魅力的、かつ効果的な学びの場を提供し、教育の質を向上させていけるのではないかと期待する。ただ同校は、活用するのが『目的』ではなく、『手段』という考えで、端末を必要に応じて使うのが基本だ。

その上で「教員に1から10まで教えてもらうのではなく、『これが見たいから自分はどうしたいか』などと考えていける力を付けるために活用できた一番」と強調する。「整理する」「調べる」「交流する」「発信する」ための手段として端末を活用して、同校は、児童の思考力が身に付くようなICT教育を今後も展開していく考えだ。(濱 正太郎 奈良支局)